本文の読解から自己表現へ（3）

授業レポート CLASS REPORT

― 教科書本文を利用した自己表現活動の工夫 ―

立川研一　Tatsukawa Kenichi　（大分県九重町立野上中学校）

1. 計画的自己表現活動

本稿では教科書本文を利用した英作文のさせ方や発展的な自己表現活動についての実践例を述べる。

私は学期や単元の節目に生徒に取り組ませる大きな自己表現活動を以下のように考え，それぞれの活動が可能になるように，毎回の授業の中で小さな自己表現活動を仕組んでいる。（以下の課題は例であって，固定的なものではない。教科書の内容や生徒の状況などに応じて適宜変えている。）

【1 年生】「自己紹介・他者紹介」
「私の一日」
「クリスマスカードを書こう」
「4 行詩」
【2 年生】「日記を書こう」
「動物園の動物は幸せか？」
「行きたい場所とその理由」
「修学旅行の思い出」
「More than 5 行詩」
【3 年生】「日本の文化を説明しよう」
「究極の選択」
「My Opinion」（環境や平和など）
「Show & Tell」
「卒業の詩」

例えば 2 年生の「行きたい場所とその理由」という自己表現活動は，教科書で「未来表現」「There is/are の文」「不定詞」の学習を終えたあとに行う。そこで，毎回の授業の中では「行きたい場所（want to）」「そこにあるもの（There is/are）」「そこに行ったらしたいこと（不定詞副詞的用法）」「そのときの自分の感想（will be ＋感想・感情）」などを，基本文や本文を利用しながら段階的に作らせていくのである。

最終的に生徒が書き上げた文は以下のようなものである。組み合わせれば長い作文であるが，個々の文は毎回の授業の中で練習してきたものばかりである。教科書で学んだ Second，Finally などの表現をうまく利用していることもわかる。

【生徒の作文例】
○ I want to go to Tokyo to do many things.
There are a lot of refuse. It is dirty.
Because there are many high-rise buildings. I think that we must clean Tokyo.
Second, there are many TV stations. My favorite Tokyo TV station is Fuji TV. It is big. If I go there, I will meet famous persons.
Third, I want to go to an aquarium in Sunshine City. It is large. And I want to go to Ueno Zoo. There are many animals to touch.
Finally, I want to go to Tokyo Disney Land. There are many rides. It will be fun.

また，この活動の前には，本誌 Vol.14 での拙稿「『活用（output）』力を高める英語の授業」で紹介した自己表現活動，「動物園の動物は幸せか？」を行っており，そこで用いた「If 現在形，未来表現 .」の文型も散見された。

2. 個々の授業での自己表現活動

単元や学期の節目に設定する大きな自己表現活動に向けて，個々の授業ではどのような工夫を行っているか，以下に紹介する。

(1) 文の一部を書き換える

私は基本的には教科書の本文や基本文を利用し，生徒自身に関わる表現に書き換えさせることが多い。基本文に限らず，「これは後の自己表現に使えそうだ」と思われる表現があればすぐに利用する。会話の一部を取り出して，自分たちの身近な話題に書き換えさせることもある。

例えば，平成 18 年度版 *NEW CROWN BOOK 1*

p.69 には以下のような表現がある。

> Many people in my town speak Spanish.
> It's useful.

この文の下線部分を自分たちの町に合わせて書き換えさせるのである。班ごとに意見を出し合わせると，生徒たちは様々な文を作る。

・Many people in my town speak Oita-ben. It's useful.

といった単純なものから，

・Many old people in my town like *tsukemono*. It's smelly.

など，工夫を凝らしたものも見られた。さらに生徒の興味に合わせて，town を school や class に変えたり，people を teachers や students に変えたりすることで，

・Many teachers in my school come to school by car.
・Many students in my school come to school by train.

など，学校紹介の表現へと広がっていった。

(2)「オリジナル比喩」を創作する

教科書の一部を使った作文の例として，「創作比喩文」の活動を紹介する。平成 18 年度版 *NEW CROWN BOOK 2* p.68 は，“This room is as cold as a fridge.” という文で始まっている。

“as 形容詞 as ～” は，“like (a) ～” と並んで英語でよく用いられる直喩の表現の 1 つである。その中には “as white as snow” や “as cold as ice” のようにわかりやすいものもあれば，“as cute as a button” などのように日本人には理解しにくいものもある。

まずは以下の（　　）内にどんな動物が入るかを予想させ，答え合わせをする。

> 英語の比喩表現
> (1) as sick as a (　　) :「とても体調が悪い」
> (2) as quiet as a (　　) :「とても静かな」
> (3) as black as a (　　) :「真っ黒な」
> (4) as busy as a (　　) :「とても忙しい」
> (5) as free as a (　　) :「とても自由な」
> (6) as wise as an (　　) :「とても賢い」

> 答え
> (1) dog (2) mouse (3) raven[crow] (4) bee
> (5) bird (6) owl

「えー？」という意外な反応から，「へえ」という納得のものまで様々である。他にもたくさんあるが，ここでは後の自由な自己表現につなげるため，あえて多くは扱わない。

次に，“○○ is as △△ as (a) □□.” という形になるような自分たち独自の比喩の文を，班ごとに協力して作らせる。例として私がいつも挙げるのは以下の文であるが，たいていはブーイングとなる。

> Ken is as handsome as Johnny Depp.

2 番目の as の後ろは動物でも食べ物でも，何でもよいことにする。また，納豆などの日本語を用いることもよしとする。できあがった文は，ALT が来校したときに acceptable かどうか判定してもらった。

> 【生徒の作品例】
> My spirit is as sticky as *natto*.
> Mr. X is as noisy as a typhoon.
> My mother is as kind as a marshmallow.
> Math is as difficult as a puzzle.
> Our class is as noisy as a zoo.

(3) 会話の一部を固定する

平成 18 年度版 *NEW CROWN BOOK 2* p.13 には次のような会話がある。

> Paul: I studied *shodo* for an hour and a half.
> Kumi: That's a long time. Were you tired?

ここでは，二重下線部を残させ，「相手が『それは長いね！』と言うような Paul の台詞を作りなさい」という指示を行った。またそれに合わせて久美の台詞の後半部分（波線部）も適切に変えさせた。

生徒は自分たち自身の生活の中から，自然に一般動詞の過去形を使った文を作らねばならず，またそれに応じる be 動詞の過去の疑問文も作らねばならない。ペアや班でアイデアを出し合うことで，楽しく文型練習に取り組むとともに，この lesson での主眼である過去形の文を自然に練習することができた。

【生徒の作文例】
○A: I played a computer game for three hours.
B: That's a long time. Were you happy?
○A: I talked with Mr.Tatsukawa for 15 minutes.
B: That's a long time! Were you tired?

なお，最後の文は“Were you ～?”だけではなく，形容詞によっては“Was it ～？”を使わなければならないものもある。この学習は後の「(休日の) 日記を書こう」という活動に向けてのよい練習となった。

3. 「卒業の詩」作り

３年生を担当したときは，卒業前に関西大学教授の田尻悟郎氏の実践を参考にした授業を行う。以下の写真は，『ブルーデイブック』(Bradley Trevor Greive，竹書房) の中に収められた１枚である。

この写真をじっと見つめさせ，「この２頭のクマは何を語っているのかな？　どんな場面だろう？」と，日本語で想像させる。ほとんどの答えは「別れのシーン」,「励ましている」などである。そこで,「クマ同士が語り合っている言葉を日本語で書いてみよう」と問いかけた。

書けたところで「班で協力して，それを『心が伝わる英文』で表現してみよう」と指示した。その際に，「『想い』を伝えるためには，多くの文を使うこともある」ので，１つの文が長くなってもよいことを告げた。こうして知恵を出し合い，ALT のアドバイスも受けながら，各自の文をつなげていったものが次の作品である。

【班ごとの作品例】
○ Well-done, you tried your best.
Are you scared? Don't worry.
Now I'm here with you.
Remember my words whenever and wherever you are.
○ Don't worry about anything.
We'll be friends forever.
Good luck!
I never forget you.
We are sure to see each other again.
○ You were afraid, weren't you?
You were sad, weren't you?
I am sorry I couldn't understand you.
I have loved you for a long time.
It's hard for me to say goodbye.
But you are not alone.
I will always with you in your heart.
○ You can do it. So take it easy.
When you feel lonely, you can come back here anytime.
I always wait for you.
So we support each other in our hearts.

卒業や受験を控えた生徒たちは，互いを思いやり，励まし合う心からか，皆真剣に取り組んでいた。作品には，３年間で学んだ様々な表現がちりばめられていた。

この活動は，「言葉は心を運ぶもの」という思いをもって卒業後も英語学習に取り組んでほしいという願いから取り組んだ活動である。なお，この実践は構成的グループエンカウンター (SGE) 的手法を取り入れた英語授業の例として，『大分大学教育福祉科学部附属中学校研究紀要第 53 集』に詳しく述べている。

【引用文献】
Bradley Trevor Greive (2000)『The Blue Day Book ブルーデイブック』竹書房.